

技術者の心 その一 文の構造

文章は文の集まりである。一文で何をいつているのかが分からなければ、その文章で何がいいたいのかが分からない。文章を読み取るときにつまずくのは、一文一文を理解できないことから始まる。その一文は何を言っているのか、シンプルに理解することから始めよう。

『例』

(01) あー、私の大切な花瓶が机から転げて落ちて行く。

(02) 机の上に置いた拍子に机にぶつかり、花瓶は安定を失って転倒し、手で支えるひまもなく床の上へ。

(03) 机の自然現象としての落下を誰も途中で止めることはできない。

(04) 止まれ、と叫んでも無駄、次の瞬間に花瓶は堅い床にぶつかりて粉々になるだらう。

(05) でも、アリスは兎穴の中で落下しながら、ジャムの容器を手にとったり、また棚に戻したりする「J」とができたのだ。

(06) そして深い穴の底に落ちても、かすり傷一つ負わなかつた

『課題』 それぞれ担当者を決めて責任を持つて構造を読み解こう。

番号 担当者

(07) () 心とは自由なものである。

(08) () 人が考えたり、感じたり、意欲を持つたりするのが心によるのだとすれば、その心は、いわば自然の世界から解放されていて自由なのである。

(09) () 心が自然界の法則から解放されていて自由であるといふことは、人の大きな特徴である。

(10) () そしてこのことが、人が技術を持つて居ることの根拠でもあると考へてよい。

(11) () 技術といふと、自由な心などといふものと関係ないと思う人が多いだらう。

翻訳 指導者

(12) () 確かに実現された技術とは、たとえば石を飛ぶ飛行機は、伝統力学の法則に厳密

に従つてゐるが、自然法則にしつかつて離れて、お行儀よく存在してゐるもの

である。

(13) () あらゆる技術は、自然法則にしつかつて離れて、お行儀よく存在してゐるもの

である。

(14) () やの結果「技術とは自然法則の意識的適用」と云ふいはば、既述通りの定義で技

術がわかつたよしな氣にならぬ人が出て来ても止むを得なこととなる。

(15) () 確かにでも上がつた技術は、自然法則の中でしか存在し得ない。

(16) () IJは当たりまえのIJである。

(17) () しかし新しい技術を作つ出しつてゐる現場に行けばすぐわかるIJとだが、それを支

配してくる原則は、法則の適用ではなくむしろ法則への攻撃と言つた方がよい。

(18) () 別の言ふ方をすれば、私たちが法則と呼んで納得してこるものから、いかにして解放されるかが課題となつてゐるのである。

(19) () その時、IJの解放を支えるHネルギーが、人の、自由な心である。

(20) () IJの自由を、概念形成を例にとって考えてみよ。

(21) () 人類は古い時代に、金属とガラスの存在を知つたであら。

(22) () 金属は、不透明であり、電気を流し、そして塑性変形する。

(23) () ガラスは透明で、電気を流さず、そして脆性である。

(24) () 人はやのじき既に次のよひなものを持てた。

(25) () たゞや透明で、電気を流し、やつて塑性変形するや。

(26) () やつ金属とガラスについて前記の二つの性質を考へたところ、極めて自然に、組み合せによつて八種類の物質についての概念を形成したはやである。

(27) () 透明で、電気を流し、やつて塑性変形するやのせの二つに過ぎない。